

第1章 歴史的環境

斑鳩の位置 奈良県生駒郡斑鳩町は奈良盆地の北西部に位置し、北から延びる矢田丘陵と、西へ流れる大和川に挟まれた地域である。古代の飛鳥から難波へ至る経路上に位置し、多くの寺院や宮殿が展開した歴史上重要な地域である。斑鳩町にはすでに消滅したものも含め、約70基の古墳が存在する（前園編1990）。以下では町内の主要古墳について時期別に概要を述べる。

前期古墳 前期古墳には法隆寺の東方に位置する駒塚古墳（2）がある。2000～2002年度に行われた発掘調査によって、全長49m以上の前方後円墳であることが判明した。出土した二重口縁壺から、築造時期は前期末頃と考えられる（荒木2007・2011）。

中期古墳 本書で報告する斑鳩大塚古墳（1）については、次章で詳述する。東隣する大和郡山市との境界付近には瓦塚古墳群（4）がある。1号墳は全長約97mの前方後円墳、2号墳は全長約95mの前方後円墳で、3号墳は直径30mの円墳と推定される。1号墳では発掘調査によって埴輪が出土し、築造時期は中期前半と考えられる（関川編1976）。2012年には航空レーザー測量が行われ、詳細な測量図と赤色立体図が作成された（平田2014）。瓦塚古墳群は斑鳩町でも屈指の古墳群だが、近隣の小泉大塚古墳、六道山古墳とともに大和郡山市に属する矢田丘陵の系譜に連なるという見方がある（前園編1990：6頁）。

藤ノ木古墳を見下ろす北方の尾根上に、4基の古墳からなる寺山古墳群（6）がある。2014～2015年に奈良大学が測量調査を行った。1号墳は直径23mの円墳か全長30mの前方後円墳、2号墳は20×15mの円墳、3号墳は19×13mの方墳、4号墳は16×14mの円墳と推定される。埋葬施設はいずれも竪穴系のものと推定され、中期後半～後期にかけての初期群集墳と考えられる（河村・高左右・豊島2015、間所・宮畑・豊島2016）。

後期の古墳 後期古墳では、法隆寺の西に位置する藤ノ木古墳（7）がある。藤ノ木古墳は直径50m以上の円墳で、南東方向に開口する全長約14mの横穴式石室内に未盗掘の家形石棺が確認された。出土した武器、武具、馬具は古墳時代の金工技術や国際交流を物語る資料である。葺石はなく、墳丘裾に円筒埴輪が巡っていたと考えられる（勝部ほか編1990、前園ほか編1995、平田2008）。

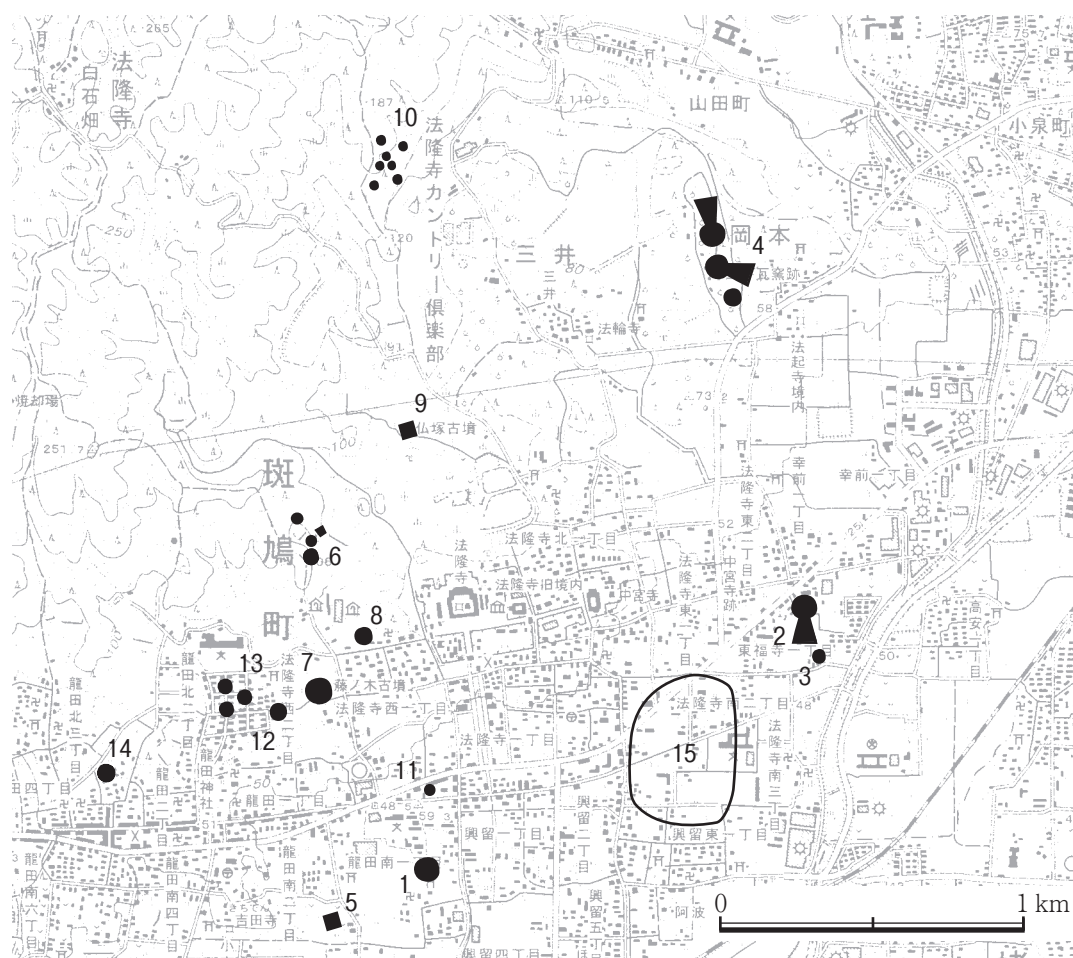
藤ノ木古墳の北東約200mに位置する春日古墳（8）は直径30m以上の円墳である。墳丘南側に横穴式石室の一部とみられる石材が露出しており（平田2013）、藤ノ木古墳の次世代の首長墳と考えられる。この他、法隆寺北方の谷に位置する仏塚古墳（9）は、一辺約23mの方墳で、両袖式の横穴式石室をもつ。石室内から亀甲形の陶棺片が出土している（河上・関川1977）。

終末期の古墳 終末期古墳では、藤ノ木古墳の西方に竜田御坊山古墳群（13）がある。3号墳は横口式石槨を埋葬施設とし、陶棺を安置していた。棺内からは若年男性の人骨とともに筆軸らしき管状ガラス製品、三彩有蓋円面硯、琥珀製枕など他に類を見ない副葬品が出土し、被葬者は上宮王家の一員と推定されている（泉森編1977）。また、藤ノ木古墳の西150mに位置する甲塚古

墳（12）は竜田御坊山古墳群と同一の丘陵上にあり、終末期古墳の可能性が高い。2016年に奈良大学が測量調査を行い、最大で直径30mの円墳の可能性ある（土屋・豊島2017）。

以上、調査によって内容の判明している例を中心に斑鳩の古墳を概観した。斑鳩の古墳は前期後葉の駒塚古墳の造営に始まり、中期の斑鳩大塚古墳、瓦塚古墳群へと続く。中期後半から後期前半にかけては有力な首長墳が見当たらない。後期後半の藤ノ木古墳の築造以降、春日古墳など再び有力な首長墳が見られるようになり、法隆寺、中宮寺、法起寺などの古代寺院が展開する。

（豊島）



国土地理院発行 2万5千分の1 地形図「信貴山」を使用

- | | | | | |
|----------|---------|-------------|---------|----------|
| 1 斑鳩大塚古墳 | 2 駒塚古墳 | 3 調子丸古墳 | 4 瓦塚古墳群 | 5 戸垣山古墳 |
| 6 寺山古墳群 | 7 藤ノ木古墳 | 8 春日古墳 | 9 仏塚古墳 | 10 三井古墳群 |
| 11 亀塚古墳 | 12 甲塚古墳 | 13 竜田御坊山古墳群 | 14 神代古墳 | 15 酒ノ免遺跡 |

図1 斑鳩町内の古墳時代遺跡分布

第2章 調査の経緯と経過

1 過去の調査

斑鳩大塚古墳については、古くは野淵龍潜による『大和国古墳墓取調書』に記載があるが（秋山編1985）、本格的な調査は1954年の忠霊塔建設工事に伴うものが最初である。調査では埋葬施設の粘土槨が検出され、銅鏡、筒形銅器、石釧などの副葬品が出土した。また、当時は直径約35m、高さ約4mの円墳で、葺石、円筒埴輪列の存在は確認されたが、周濠は持たないとされていた（北野1958）。

しかし、その後は発掘調査が行われず、古墳を保存・活用するためには、詳細な情報を把握する必要があった。奈良大学文学部文化財学科は2013年8月19日から9月3日にかけて測量調査を行い、さらに11月に地中レーダー探査を行った（梅澤・清水・中村・豊島2014）。その結果、本古墳が周濠を伴う前方後円墳である可能性が浮上した。前方部と周濠の有無を確認するため、2014年3月から約1ヶ月間、斑鳩町教育委員会と奈良大学文学部文化財学科が古墳周辺の発掘調査を行った。3ヶ所の調査区を設定した結果、第1調査区で幅約8mの周濠を確認したが、前方部は確認できなかった（豊島編2015）。

また、前方部の確認を目的として、2015年3月2日から4月12日にかけて第2次調査を行った。墳丘東側に設定した第6調査区で張り出し部の一部とくびれ部を確認したが、その規模は確定できなかった。さらに、墳丘北側の第4・5調査区で周濠を確認し、墳丘南側の第7調査区では調査区全体が周濠内であることが判明した（豊島・間所編2016）。

さらに、墳丘の構造と規模の解明を目指し、2016年2月19日から3月31日に第3次調査を行った。第8調査区で検出した張り出し部は、部分的な確認に留まったものの、幅約11.6m、長さ約3.6mの規模であると判明した。また、調査区の南半部では墳丘裾付近の円弧を検出し、本来の墳端は残存する墳丘よりも外側にあることが判明した（豊島・土屋編2017）。

（花木大地）

2 調査の経過

調査の経過 3年間の調査成果をふまえ、引き続き墳丘と周濠の規模と構造を確定するため、第11～15調査区を設定した。また、調査の過程で、墳丘東側の周濠を確認するために第16調査区を追加した。

今回の調査は奈良大学文学部文化財学科と斑鳩町教育委員会が共同で行った。調査期間は休日と雨天を除く2017年2月21日から3月27日までの計25日間で、経過は以下の通りである。

2月21日 各調査区を設定。堀削作業開始。

2月24日 第14調査区で、墳丘と周濠埋土らしき土層を確認。



1 掘削作業（第15調査区）



2 排水作業（第11・12調査区）



3 写真撮影（第14調査区）



4 図面作成（第12調査区）



5 墳丘の掘削（第14調査区）



6 埋め戻し作業（第11・12調査区）



7 参加者集合写真



8 遺物整理作業

図2 調査の様子

- 2月25日 第12調査区で、墳丘らしき土層を確認。
- 3月1日 第14調査区と第15調査区で、墳丘と周濠の境界線が見え始める。
- 3月3日 第12調査区は検出を終え、土層の検討と写真撮影を行う。
- 3月4日 くびれ部を確認するため、第11調査区と第12調査区を拡張。
- 3月6日 第16調査区を設定し、堀削作業開始。第14調査区は、墳丘方向へ拡張開始。
- 3月7日 くびれ部を再確認するため、第11・12調査区をさらに拡張。
- 3月8日 第13調査区を設定し、堀削作業開始。
- 3月16日 第11・12調査区完掘。
- 3月17日 第13調査区完掘。写真撮影。埋戻し開始。
- 3月20日 第11・12調査区写真撮影。第14調査区埋戻し開始。第15調査区写真撮影。
- 3月22日 第11・12調査区埋戻し開始。
- 3月23日 第15調査区埋戻し開始。
- 3月25日 第16調査区埋戻し開始。
- 3月27日 埋戻しと撤収作業を行い、調査終了。

整理と報告書作成 発掘調査の終了後、奈良大学文学部文化財学科で遺物整理および報告書作成を行った。今回出土した遺物の一部は、奈良大学博物館平成29年度企画展1『奈良大学の考古力—奈良県斑鳩大塚古墳と栃木県中根八幡遺跡（縄文）の調査—』で、2017年7月3日から9月1日まで公開した。また、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2016年度発掘調査速報展『大和を掘る35』にて、2017年7月15日から9月3日まで公開した。

発掘調査参加者 今回の調査参加者は以下のとおりである（学年は2017年3月当時）。

豊島直博（奈良大学文学部准教授）、荒木浩司（斑鳩町教育委員会）、小堀 僚、間所克仁（以上、大学院修士2回生）、岩永祐貴、土屋博史、和田直己（以上、大学院修士1回生）、古林舞香、南 貴匡（以上、文学部4回生）、泉 眞奈、上野龍彦、桑原一徳、後藤寛子、田口裕貴、中野将輝、花木大地、廣瀬史弥、松澤健太（以上、文学部3回生）、栗野翔太、石丸 彩、稲垣 僚、井本 葵、大西俊幸、大野隆法、大橋知幸、小原篤史、桂川卓也、加納大誉、亀村啓太、河原秋桜、北川直人、北谷雄紀、桐部夏帆、金原 駿、小西優介、鈴木郁哉、田中秀弥、中川真実、中村優太、長谷川 翼、馬場彩加、前田 淳、三井 淳、三輪真大、森田彩未、森田ななみ、山本将輝（以上、文学部2回生）、上野あさひ、内田 徹、漆原尚輝、北門幸二郎、鐵あかね、静 幸穂、芝本稜介、高塚博徳、高橋知寛、竹川可純、築山弥矢、中川森仁、松島隆介、三輪夏美、矢野義治（以上、文学部1回生）、大西幹男（通信教育部卒業生）、伊東 豊（通信教育部学生）、高岡桃子（奈良女子大学大学院修士1回生）、大澤 嶺、園原悠斗（以上、立命館大学文学部4回生）、安藤 淳（立命館大学文学部3回生）、嘉戸愉歩（熊本大学文学部3回生）、相馬勇介（近畿大学文芸学部3回生）、廣重知樹（熊本大学文学部2回生）。

（花木）

第3章 発掘調査の成果

1 調査区の配置

2013年度の調査では3ヶ所の調査区を設け、第1調査区で周濠を確認した。続く2014年度の調査では4ヶ所の調査区を設け、第6調査区で墳丘の北側くびれ部と周濠を確認し、第4・5・7調査区でも周濠を確認した。2015年度の調査では墳丘の東側と南側に3ヶ所の調査区を設定した。第8調査区で墳丘の張り出し部と周濠、第8・9調査区で周濠を確認した。

今年度の調査は墳丘の構造、張り出し部の規模、古墳西・南側の墳丘と周濠の確認を目指し、古墳東側に3ヶ所（第11・12・16調査区）、南側に1ヶ所（第13調査区）、西側に2ヶ所（第14・15調査区）の調査区を設定した。以下、各調査区の成果について述べる。（岩永祐貴）

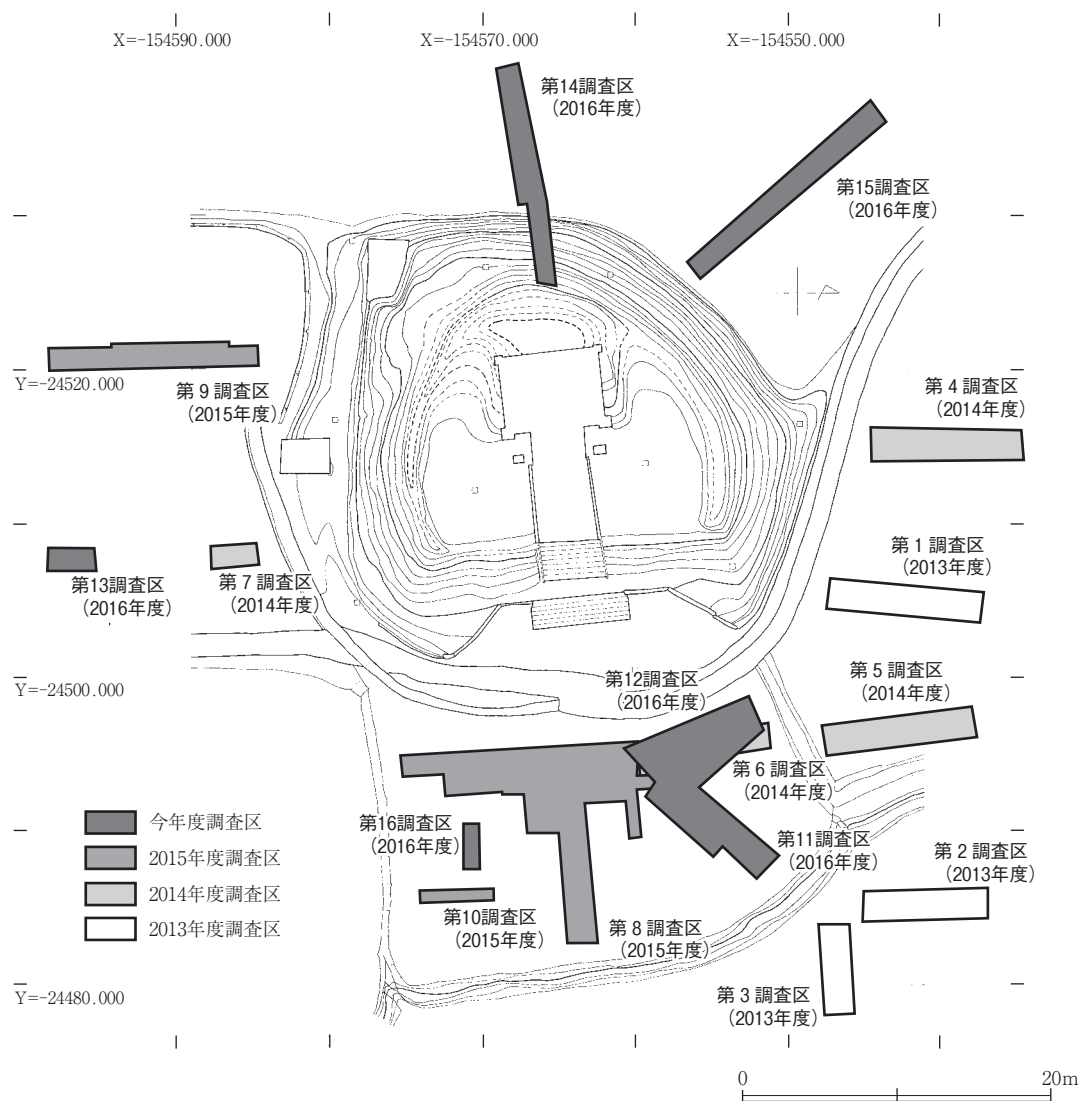


図3 調査区配置図 1:500

2 第11・12調査区（図4、図版1）

位置と目的 第11調査区は、2015・2016年度調査で確認した張り出し部の規模と周濠の範囲の確定を目的として、墳丘東側に設定した。当初は北東から南西方向に長さ9m、幅2mで設定した。いっぽう、第12調査区はくびれ部付近の墳丘と周濠の再確認を目的に、2015年度の第6調査区の西側に設定した。当初は北西から南東方向に長さ4m、幅1.5mで設定した。しかし、張り出し部の範囲が確認できなかったため拡張し、両調査区をL字状に繋げるに至った。両者を合わせた調査面積は約43㎡である。以下では調査区の東側部分を第11調査区、西側部分を第12調査区として報告する。

基本層序 上から順に、表土である黒褐色砂質土（厚さ約20cm～25cm）、近世以降の耕作土である茶褐色砂質土（厚さ約25cm～35cm）、古代から中世の遺物包含層である暗茶褐色砂質土（厚さ約20cm～35cm）となり、黄褐色砂質土の地山に至る。地山上面の標高は約45.8mである。

検出遺構 古墳に関係する遺構として墳丘および周濠を確認した。その他の遺構には古代の溝、土坑、中世以降の柱穴などがある。

墳丘は第12調査区の南西隅から約6.5mの範囲で検出した。盛土部分は削平され、遺存していたのは地山削り出し部分である。一部を古代の土坑SK01と溝SD02に削平されていた。また、墳丘は調査区南西隅から約2mの位置で北東へ屈曲し、そこがくびれ部と考えられる。くびれ部付近で周濠SD01の埋土である灰黄褐色砂質土を掘削すると、墳丘東側が緩やかに低くなり、張り出し部となる。調査区西壁で確認した張り出し部の長さは約3.4m、第8調査区の成果と合わせた張り出し部の幅は約11.5m、周濠底部から張り出し部の付け根付近までの高さは約0.3mである。

周濠SD01は、調査区南東壁で計測すると、幅約6.1m、深さ約0.3m分を確認した。張り出し部の先端付近では、周濠の幅は約2.5m、深さは0.2mで、狭く浅くなっている。周濠外側の斜面は第11調査区の南西隅から約4mの地点で急斜面となる。周濠の北東隅の肩は屈曲し、張り出し部の形態を反映した可能性がある。埋土は上層が灰黄褐色砂質土、下層が灰褐色砂質土である。埋土からは多くの埴輪と土器が出土した。

土坑SK01は第12調査区の北西隅で確認した。一辺約1m以上の方形で、調査区外へ続く。深さは約0.3mである。埋土から円筒埴輪が出土した。遺構の重複関係から、後述する溝SD02よりも古い古代の土坑と考えられる。

溝SD02は第12調査区で確認した北西から南東方向の溝である。長さ約6m分を確認し、深さ約0.3mである。埋土は上層が黄橙色砂質土、下層が暗橙褐色砂質土で、転落した葺石と考えられる拳大の礫や、円筒埴輪、形象埴輪、土器が出土した。SD02は周濠付近に古代に掘削された排水溝と考えられる。なお、SD02は周濠を検出する過程で掘削し、図上では一部が残る。

柱穴を6基確認したが、調査区内では建物としてまともらなかった。いずれも直径0.3～0.4mの円形で、中世以降のものと考えられる。

（土屋博史・桑原一徳）

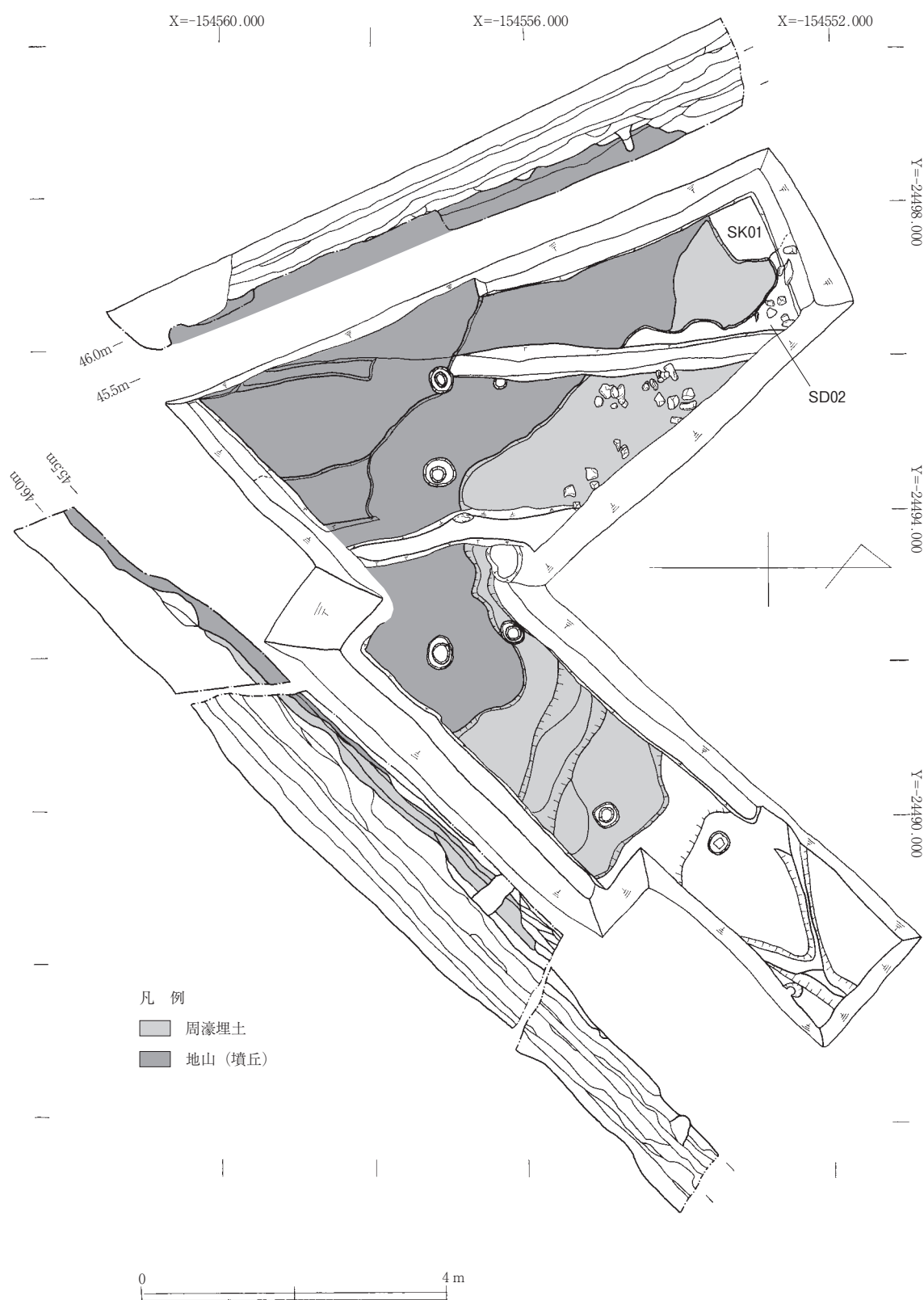


図4 第11・12調査区平面図・断面図 1 : 80

3 第13調査区（図5、図版2-1）

位置と目的 第13調査区は墳丘南側の周濠の確認を目的とした調査区である。2014年度の第7調査区の南方に、南北3m、東西1.5mの規模で設定した。調査面積は4.5㎡である。

基本層序 基本層序は上から順に表土である暗灰色砂質土（厚さ約20cm）、近世以降の耕作土である灰褐色砂質土（厚さ約20cm）、中世から近世の遺物包含層である青灰色砂質土（20～30cm）となり、青灰色砂質土の地山に至る。地山上面の標高は約45.7mである。

検出遺構 周濠、池、溝がある。

周濠SD01は調査区の北から約0.8mにわたって検出した。最深部の深さは約0.2m、埋土は青灰色砂質土である。調査区西側の排水溝部分で底を確認した。周濠は調査区の南に向かって緩やかに浅くなる。

中世以降の遺構では池を確認した。池SG01は調査区北端から約0.8mの範囲で検出した。埋土は青白色砂質土である。昨年度の第9調査区で確認した池SG01と埋土の様相が似ており、その続きと判断した。この他、近世以降の耕作溝を2条検出した。（後藤寛子）

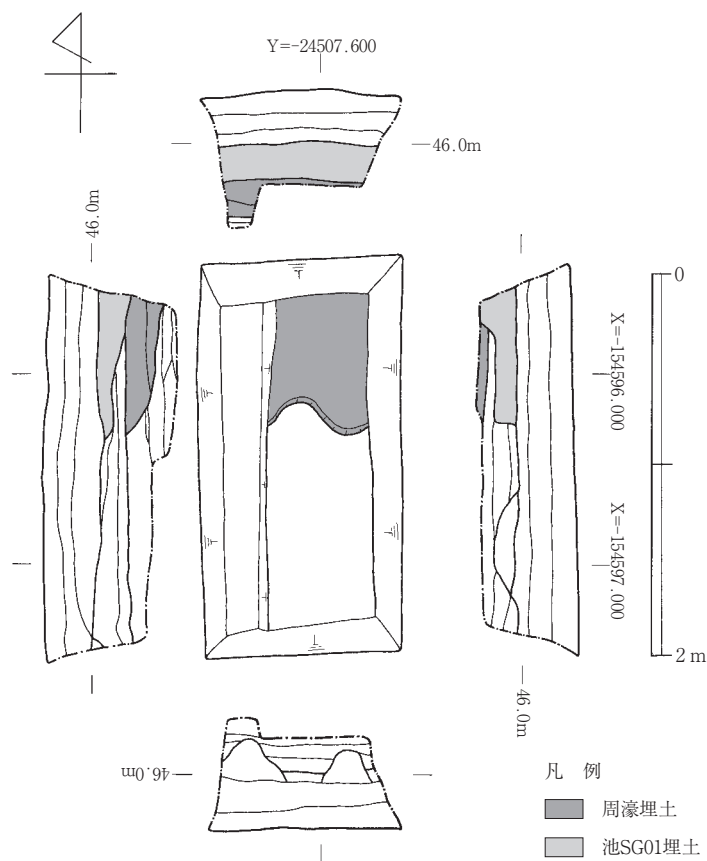


図5 第13調査区平面図・断面図 1:40

4 第14調査区（図6、図版2-2）

位置と目的 第14調査区は、墳丘西側の周濠と墳丘の確認を目的に設定した。調査区は東西15m、南北1.5mで、現存する墳丘部分は幅1mに狭めた。調査面積は約20㎡である。

基本層序 調査区西側の周濠付近と東側の墳丘部分では基本層序が異なる。西側では上から順に、表土である黒褐色砂質土（厚さ約30cm）、中近世の耕作土である橙褐色砂質土・灰色砂質土（厚さ約20cm）となり、地山である灰黄色砂質土に至る。地山上面の標高は約46.0mである。

東側では表土である橙色砂質土（厚さ約90cm）、後世の盛土と考えられる橙褐色砂質土・灰色砂質土（厚さ約60cm）となり、灰黄色砂質土の地山に至る。調査区東端での地山の標高は46.6mである。

検出遺構 墳丘、周濠を検出した。墳丘は調査区東端から約9.6mにわたって検出した。盛土

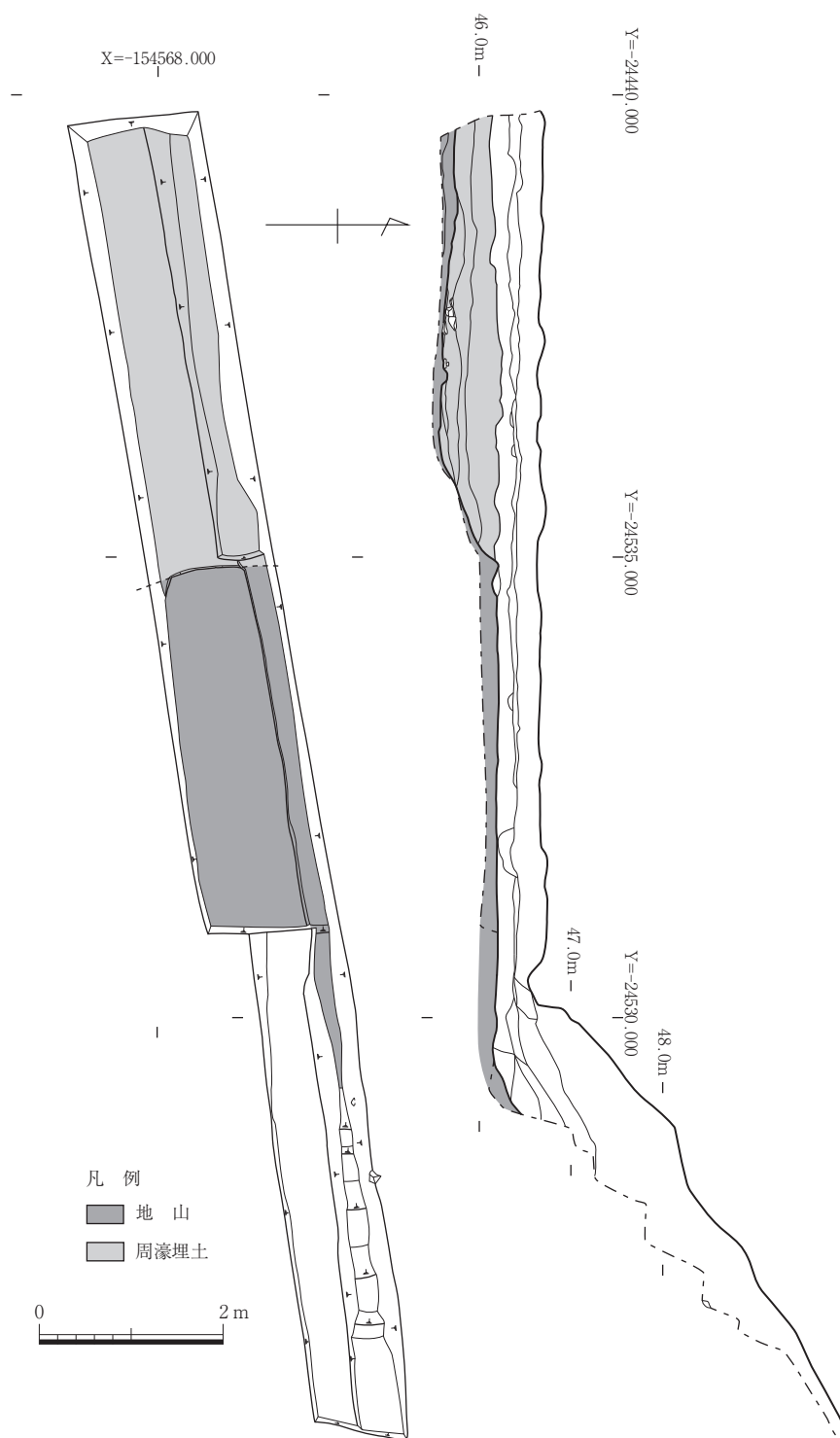


図6 第14調査区平面図・断面図 1:80

部分はすでに削平され、東端から約4.0mの地点でゆるやかに立ち上がる。墳丘からは埴輪片、瓦器片、陶磁器片が出土したことから、後世の盛土であることが判明した。

周濠SD01は調査区西壁から約4.8mの範囲で確認し、さらに西へ続く。検出面から底までの深さ約0.7m、墳端から墳裾までの距離は約1.2mである。埋土は上から浅黄灰色砂質土（厚さ約35cm）、暗灰褐色砂質土（厚さ約15cm）、明灰黄色（約20cm）である。埋土から円筒埴輪、家

形埴輪、蓋形埴輪、須恵器、土師器が出土した。埋土の最上層から飛鳥時代後半の須恵器蓋（図13-4）が出土し、周濠の埋没年代は7世紀末頃と考えられる。また、周濠底の地山直上から転落した葺石と考えられる拳大の石や、蓋形埴輪片（図12）が集中して出土した。（泉 真奈）

5 第15調査区（図7、図版3-1）

位置と目的 第15調査区は、古墳の北西部における墳丘と周濠の確認を目的に設定した。当初は長さ15m、幅1.5mに設定したが、北西方向へ0.5m拡張し、調査面積は約23㎡となった。

基本層序 上から順に、表土である黒褐色砂質土（厚さ約20cm）、中世の耕作土である茶褐色砂質土（厚さ約15cm）、古代から中世の遺物包含層である黄褐色粘質土（厚さ約20cm）となり、明灰黄色砂質土の地山に至る。地山上面の標高は約46.0mである。

検出遺構 墳丘、周濠、土坑、古代から中世の溝2条、近世以降の耕作溝を検出した。墳丘は調査区南東壁から北西約4.4mの範囲で検出した。

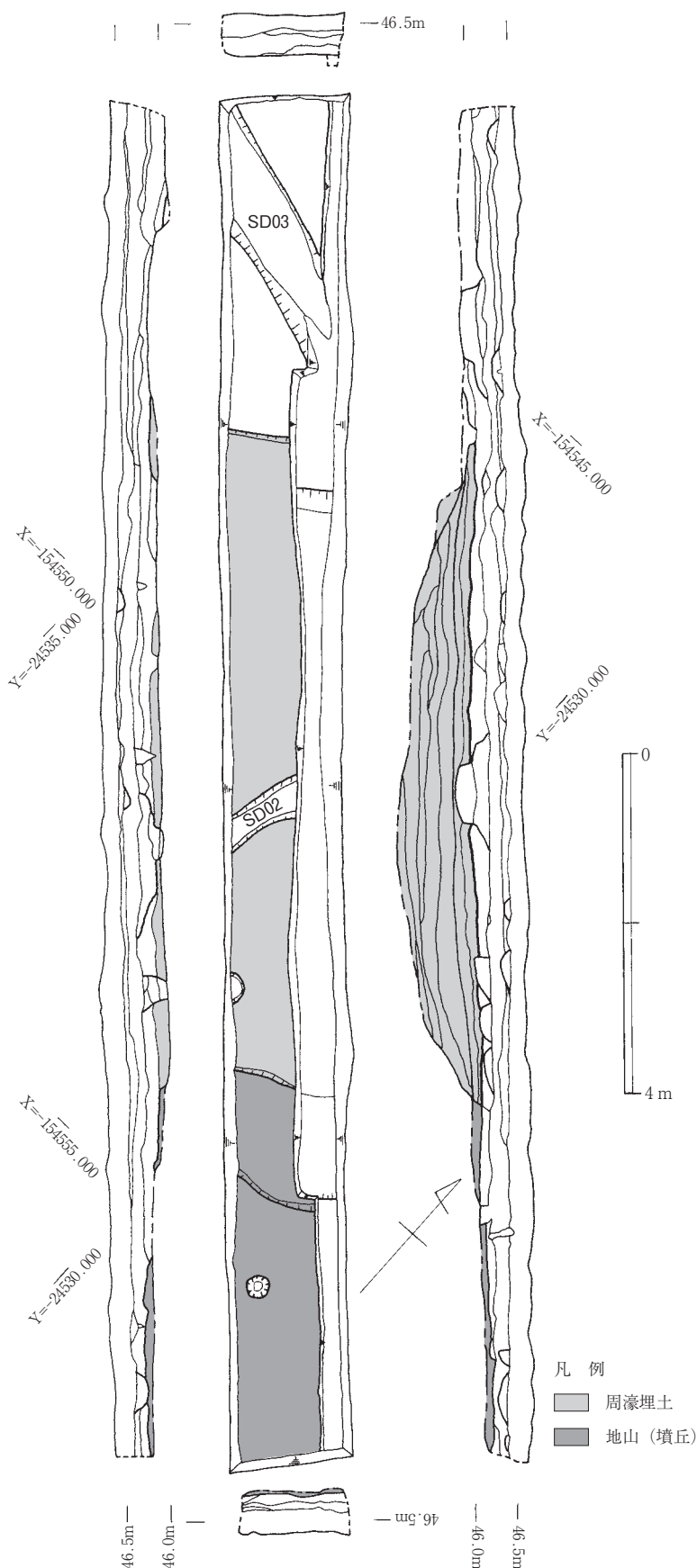


図7 第15調査区平面図・断面図 1:80

盛土部分はすべて削平されていた。墳端から墳裾までの長さは約1.2mである。

周濠の幅は、検出面で約8.9m、底部では約5mである。周濠の底は、調査区北東側の断ち割りによって確認した。検出面からの深さは約0.8mである。埋土は上から暗灰色粘性砂質土、明青灰色粘性砂質土、青灰色砂質土の順に堆積している。上層では須恵器や土師器などの古代の遺物が多く出土した。また、下層からは埴輪を中心とした遺物が出土した。とくに墳丘側の周濠の立ち上がり付近で円筒埴輪が集中して出土し、墳丘から転落したものと考えられる。さらに、周濠から転落した葺石と思われる拳大の石が出土した。

周濠の中層から上層にかけて、埴輪片とともに古墳時代後期後半の須恵器の短頸壺蓋（図13-2）が出土し、周濠の埋没年代を示している。また、埋土の上層から飛鳥時代後半頃の坏蓋（図13-3）が出土しており、最終的な埋没年代は7世紀後半と推定される。

溝SD02は調査区の中央付近で検出した南北溝である。埋土からは須恵器と土師器の細片が出土したため、中世以前の溝と考えられる。

溝SD03は調査区北西端で検出した東西溝である。埋土には瓦器、瓦を含み、中世以降の溝と考えられる。その他、近世以降の耕作溝を数条確認した。

（田口裕貴）

6 第16調査区（図8、図版3-2）

位置と目的 第16調査区は墳丘の東側で周濠を確認するために設定した調査区である。調査区は東西4m、南北1m、調査面積は4㎡である。

基本層序 上から順に、表土である暗灰色砂質土（厚さ約20cm）、近世以降の耕作土である茶褐色砂質土（厚さ約40cm）、古代～中世の遺物包含層である明茶褐色砂質土（厚さ約30cm）となり、地山である黄橙色砂質土に至る。地山上面の標高は約45.4mである。

検出遺構 周濠、土坑、溝を検出した。周濠SD01は調査区西端から約2.9mの範囲で確認した。埋土は上層が灰黄褐色砂質土、下層が灰黄色粘質土である。周濠の底は調査区西端付近の断ち割りで確認し、検出面からの深さは約0.3mである。

土坑SK01は調査区南壁付近で確認し、幅は約0.3m、深さ約0.2mである。埋土からはほぼ完形の瓦器椀（図14-4）と羽釜の口縁から鏝にかけての破片（図13-10）が出土した。瓦器は川越編年のI段階C型式（川越1983）、土釜は菅原編年の大和型のB1型に位置付けられ（菅原1983）、11世紀に位置づけられる。土釜の上に瓦器椀を重ねた状態で出土したため、意図的に配置された可能性がある。このほか、調査区東側で幅約0.4mの南北溝SD02を検出した。埋土から須恵器の坏蓋（図13-6）が出土した。

（南 貴匡）

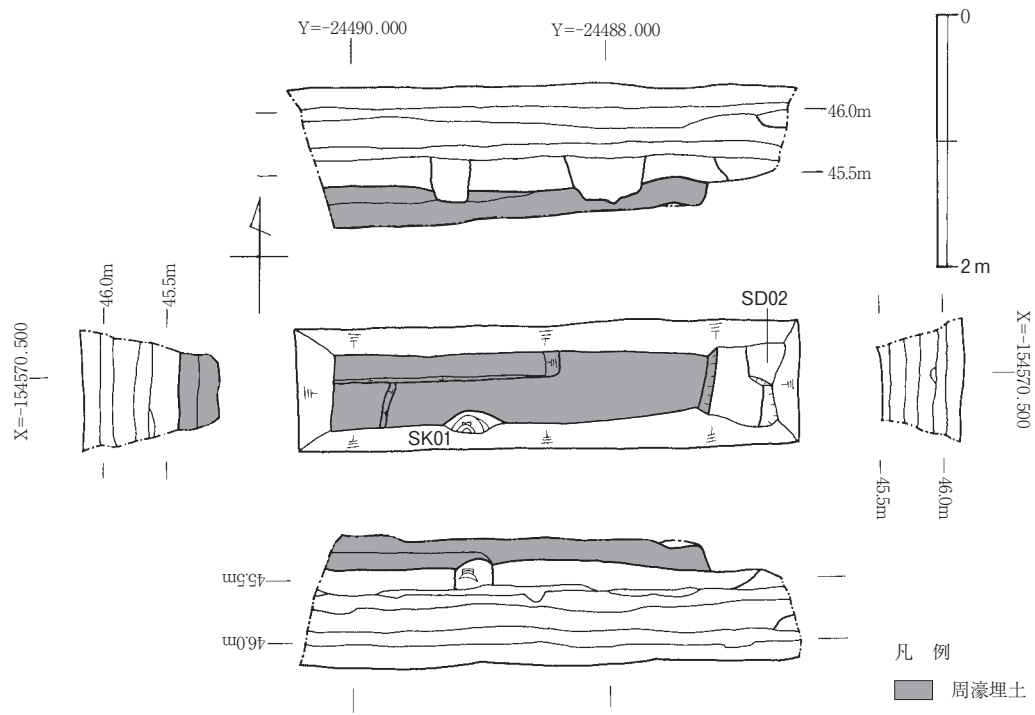


図8 第16調査区平面図・断面図 1:60

第4章 出土遺物

1 出土遺物の種類と量

今回の発掘調査では6つの調査区から整理箱11箱分の遺物が出土した。第11・12調査区からは4箱、第13調査区からは1箱、第14調査区からは2箱、第15調査区からは3箱、第16調査区からは1箱である。埴輪は第15調査区から多く出土し、円筒埴輪と形象埴輪がある。土器は須恵器、土師器、黒色土器、瓦器などがあり、その他に土馬が1点、古銭が2点出土した。（桐部夏帆）

2 円筒埴輪（図9・10、図版4・5）

今回の調査では整理箱1箱分の埴輪が出土した。その大半が円筒埴輪で、第15調査区から多く出土した。円筒埴輪の大半は破片であり、径がわかるものは少ない。以下、おもな個体について報告する。

円筒埴輪 1～8は第15調査区周濠SD01の埴輪集中部、9は第11調査区の周濠SD01から出土した。1～3は口縁部の破片である。いずれも口縁端部が外反し、外面にはヨコハケ調整を用いる。1は口径30.6cmに復元される。突帯の断面形状は台形を呈する。3は外面にヘラ記号と考えられる方形の線刻がみられる。口縁部の内面付近にヨコハケ調整が施される。

4～7は胴部の破片である。いずれも突帯の断面形状は台形であり、外面にタテハケ調整ののちヨコハケ調整が施される。4は3と同様のヘラ記号と考えられる方形の線刻がみられる。5は外面に静止痕がみられ、B種ヨコハケ調整を施したと考えられる。6は突帯の大半が剝離している。剝離部分に沈線等の突帯間隔設定技法の痕跡（辻川2003）は確認できない。4の厚みは約1cmであるが、5～7は厚みが約0.6cmと薄く、ヘラ記号を施される個体とは様相が異なる。

8・9は底部の破片である。8は外面にタテハケ調整が施され、内面の最下部には強いヨコナデ調整が施される。9は底径19.4cmに復元される。やや内湾した直後に、わずかに外傾して立ち上がる。内外面ともに摩滅しており、調整は不明である。

朝顔形円筒埴輪 10・11は頸部から口縁部にかけての破片である。10は第14調査区の遺物包含層から出土した。残存口径31.2cmに復元される。外面は摩滅しているものの、タテハケ調整が一部にみられる。11は第12調査区の遺物包含層から出土した。残存口径24.4cmに復元される。突帯は剝離し、内外面とも調整は不明である。

埴輪の特徴 円筒埴輪は口縁端部が外反するものが多く、突帯の断面形状は台形を呈する。また、外面調整にタテハケ調整ののちにヨコハケ調整を用いる個体が多い。外面や断面に黒班がみられ、野焼き焼成と考えられる。以上から、川西宏幸編年のⅢ期に位置付けられる（川西1978）。いずれも胎土に金雲母と白色砂粒が多く混じる。突帯形状や外面調整は昨年度までの出土例と共通する。口縁端部が外反する個体は第15調査区の出土例に特徴的で、胎土も他の個体と異なる。

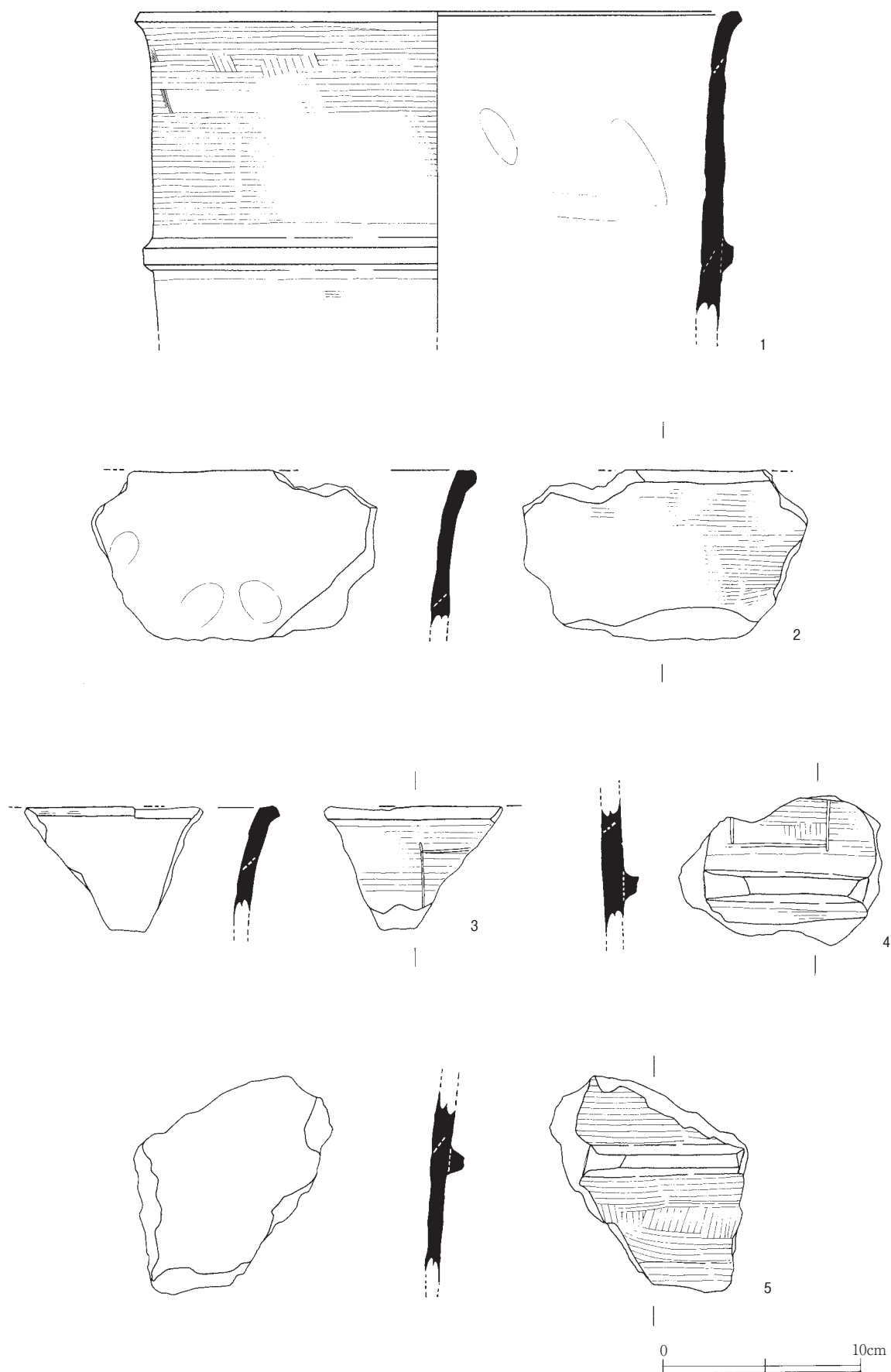


図9 円筒埴輪実測図1 1 : 3

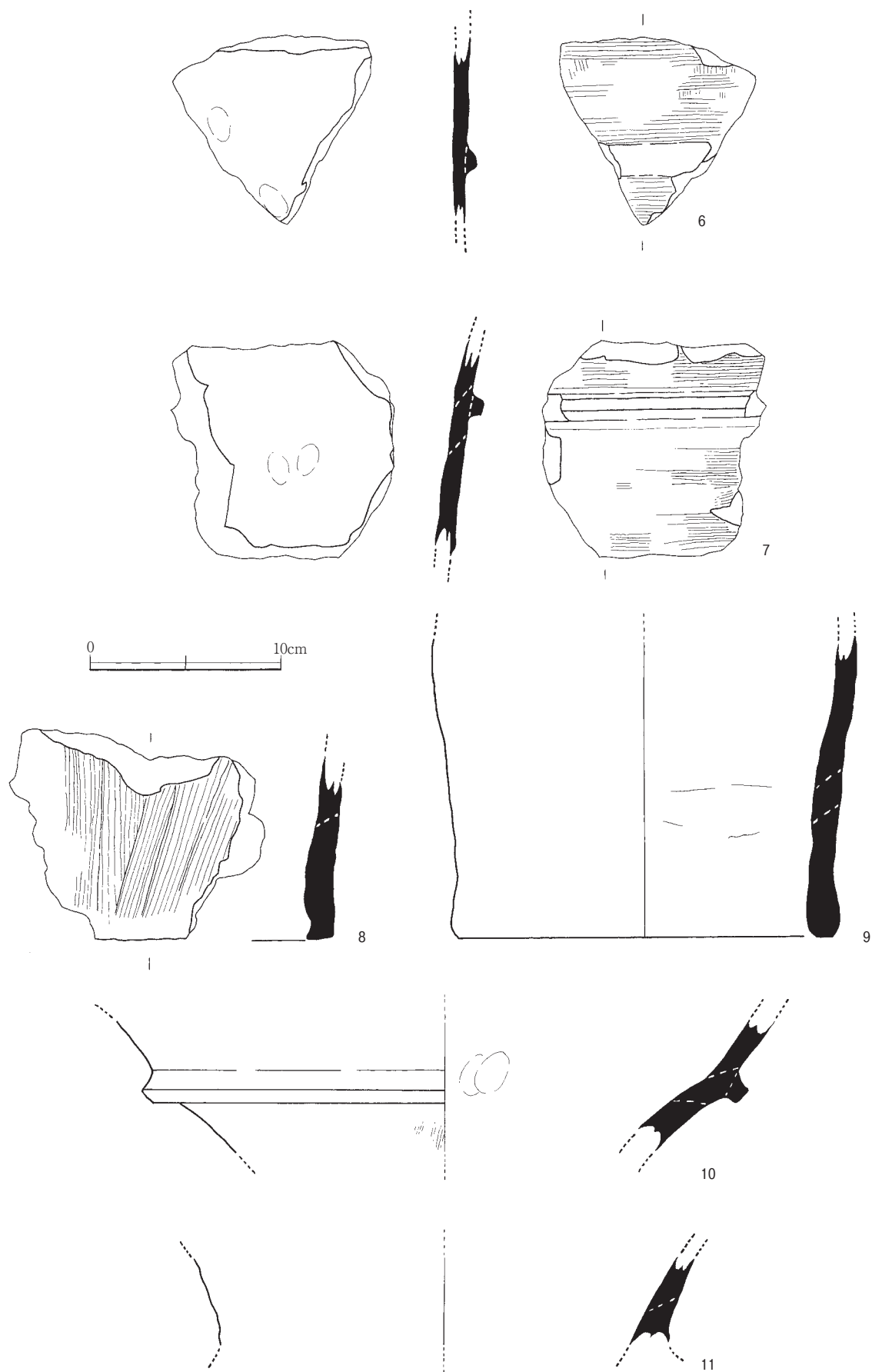


図10 円筒埴輪実測図2 1 : 3

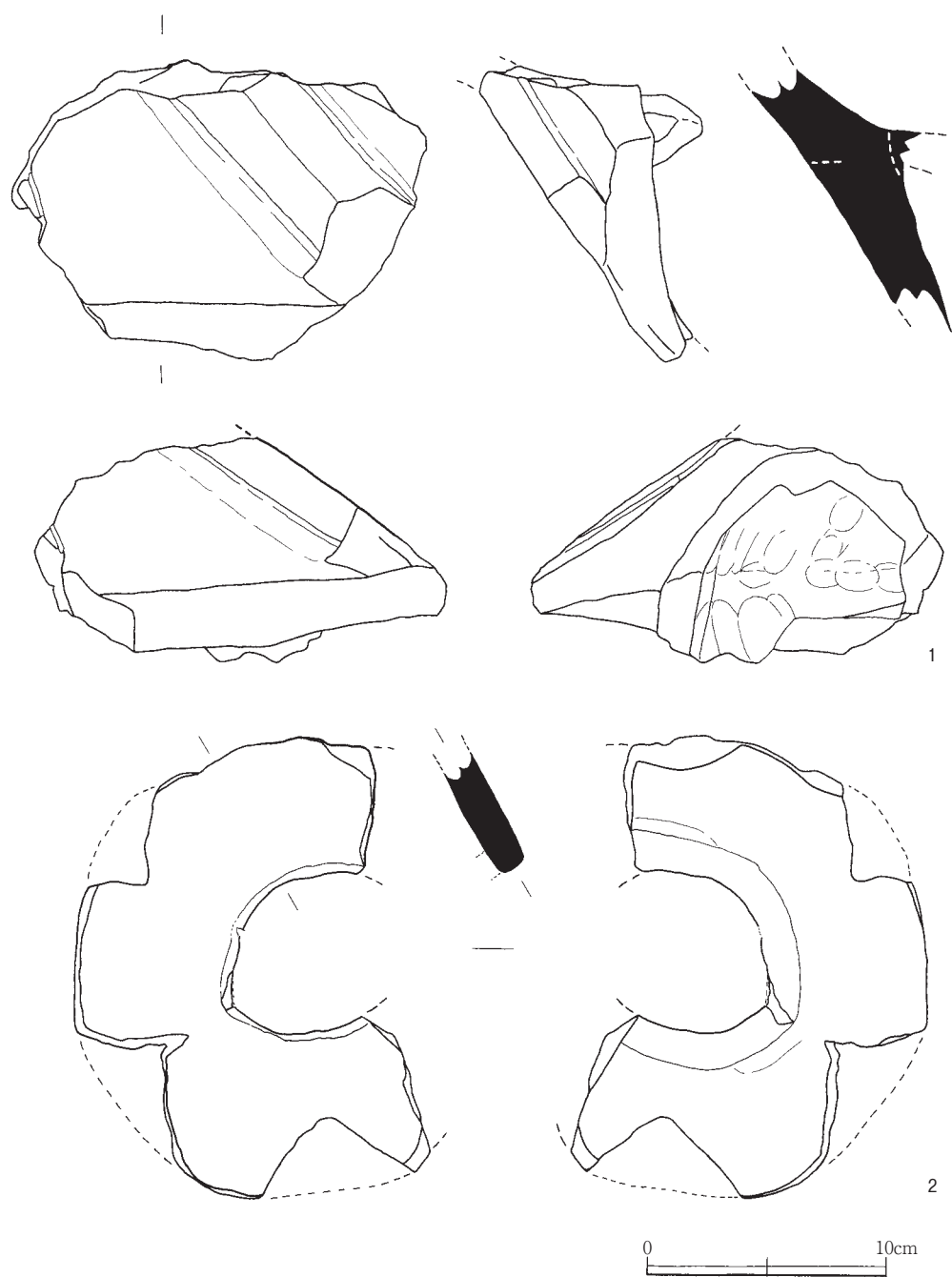


図11 形象埴輪実測図1 1:3

それらが樹立された位置による製作集団の違いを表す可能性がある。

(石丸 彩)

3 形象埴輪 (図11・12、図版6)

形象埴輪は、家形埴輪と蓋形埴輪が第14調査区から多く出土した。大半は破片で、全形が窺える資料はない。以下、おもな個体について報告する。

家形埴輪 1は家形埴輪の身舎から屋根部にかけての破片である。身舎部から粘土紐を積み上げたのち、屋根部を載せて接続する。屋根部の隅棟には粘土貼り付けによる段差表現がみられる

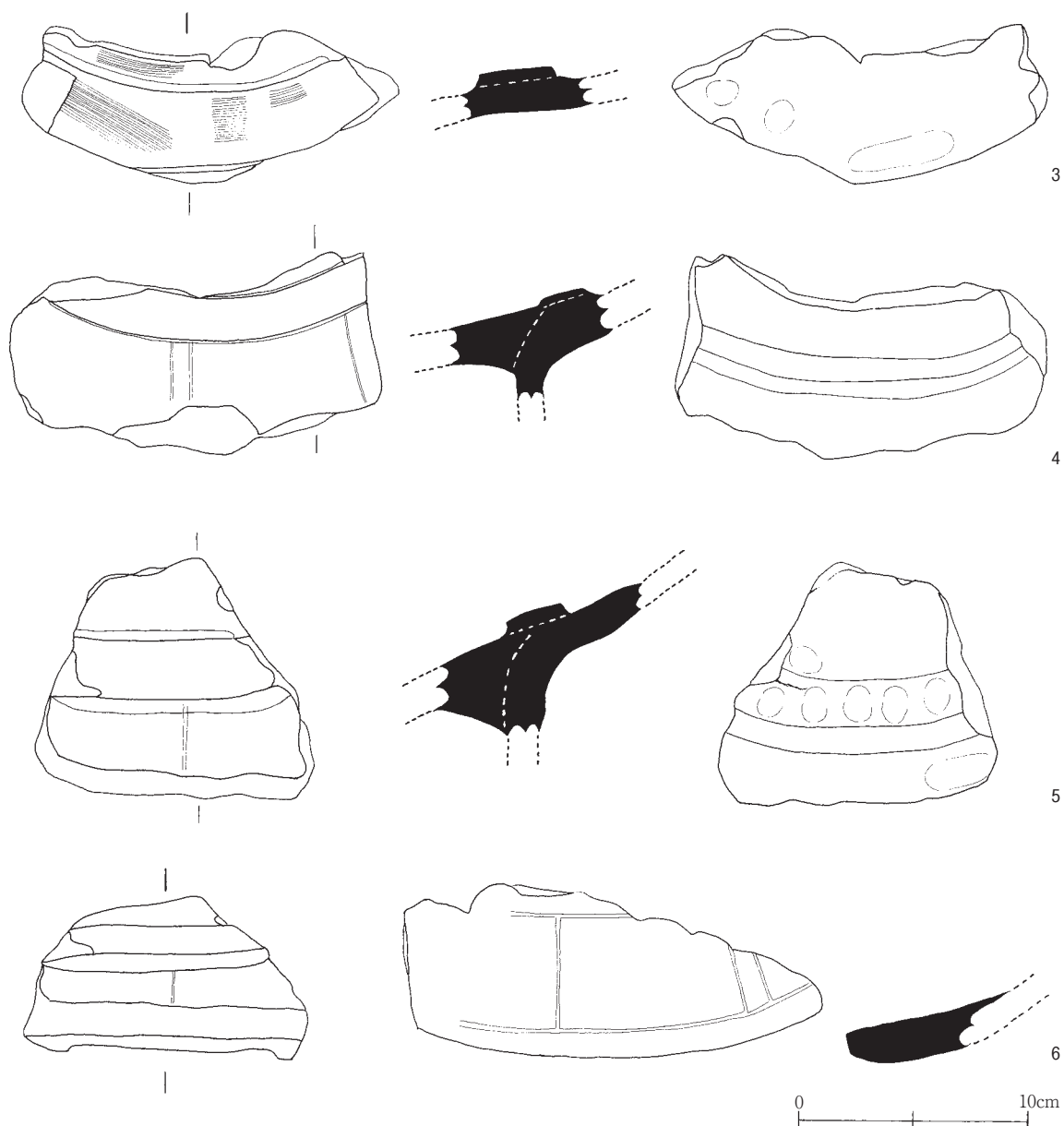


図12 形象埴輪実測図 2 1 : 3

ほか、一部に線刻がみられる。内外面ともにナデ調整が施され、身舎と屋根部の内面の接続箇所にはユビオサエ調整がみられる。屋根部の形状から寄棟造もしくは入母屋造の下屋根部分と考えられる。2は家形埴輪の部材と考えられる。円形に沿うように裏側に剝離痕跡が残る。表裏ともにナデ調整のみで仕上げている。部位は不明だが、円柱表現をもつ家形埴輪の可能性はある。

蓋形埴輪 3は蓋形埴輪の笠部上半であり、上半と下半を区切る中位突帯が巡る。内面はナデ調整、外面はナデ調整ののちにヨコハケ調整が施される。突帯端部にもヨコハケ調整が施される。4・5は笠部から台部の接合部である。笠部にはそれぞれ中位突帯が巡る。内外面ともにナデ調整が施される。4は縦方向に2条1組の沈線が入る。中位突帯の貼り付けにともなうナデのうえに沈線がみられ、沈線は突帯製作後に施文されたことがわかる。5は縦方向に1条の沈線が入る。

6は笠部の下半である。内外面ともナデ調整を施し、1条の沈線が入る。

これらの蓋形埴輪は中位分割表現が突帯で表現されること、笠部下半の沈線の入れ方により、小栗明彦編年の3段階に位置付けられる（小栗2007）。家形埴輪や蓋形埴輪の多くは第14調査区の周濠埋土で出土したことから、墳丘から転落したものと考えられる。家形埴輪は胎土の相違から2個体以上、蓋形埴輪は笠部の沈線の入れ方から3個体以上が存在したと考えられる。なお、昨年度までの調査で出土した蓋形埴輪も、笠部沈線の入れ方から3個体以上が想定でき、今回の調査成果と相違はない。（馬場彩加・泉）

4 須恵器（図13、図版7）

今回の調査では、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、陶器、磁器などが出土した。このうち、周濠の埋没時期や、主要な遺構の年代の手がかりとなる土器のほか、遺存状態のよいものについて報告する。分類と編年については、須恵器は陶邑編年（田辺1966）と飛鳥編年（西1986）、土師器は坏を飛鳥編年、皿を伊野編年（伊野1955）、黒色土器は森編年（森1995）、瓦器碗は川越編年（川越1983）に準拠した。

1は坏蓋で、第16調査区の遺物包含層から出土した。復元口径は12.0cm、残存高は4.3cmである。外面には回転ヘラケズリと回転ナデ、内面には回転ナデを施す。胎土は密で、焼成は良好である。色調は内面が青灰色、外面が暗灰色を呈する。陶邑編年のTK209型式期に位置付けられ、時期は6世紀末から7世紀前半と考えられる。

2は短頸壺の蓋と考えられ、第15調査区周濠SD01の中層から出土した。復元口径は8.8cm、残存高は3.3cmである。胎土は密で、焼成は良好である。色調は内外面とも灰色で、断面はにぶい赤褐色を呈する。陶邑編年のTK209型式期に位置付けられ、時期は6世紀末から7世紀前半と考えられる。3は坏蓋で、第15調査区の周濠SD01の上層から出土した。復元口径は10.8cmである。宝珠つまみが付き、天井部に緑色の自然釉が付着している。口縁端部内面にかえりをもつ。胎土は密で、焼成は良好である。飛鳥編年Ⅲ期からⅣ期に位置付けられ、時期は7世紀後半から末と考えられる。

4は坏蓋で、第14調査区の周濠SD01の上層から出土した。復元口径は16.4cmである。天井部に1条の突帯が付き、内外面とも重ね焼きの痕跡がみられる。色調は内外面とも青灰色を呈する。胎土は密、焼成は良好である。飛鳥編年Ⅳ期からⅤ期に位置付けられ、7世紀末から8世紀初頭と考えられる。

5は坏身である。第16調査区の周濠SD01から出土した。復元口径は10.2cm、残存高は3.4cmである。外面に回転ヘラケズリと回転ナデ、内面に回転ナデを施す。立ち上がりは低く、やや内傾する。胎土は密で、焼成は良好である。色調は内外面とも灰色を呈する。陶邑編年TK209型式期に位置付けられ、時期は6世紀末から7世紀前半と考えられる。6は坏蓋で、第16調査区の南北溝SD02から出土した。残存口径は12.1cm、つまみは径が大きく低平である。色調は内外面とも灰色を呈する。胎土は密、焼成は良好である。飛鳥編年Ⅳ期からⅤ期に位置付けられ、7世紀

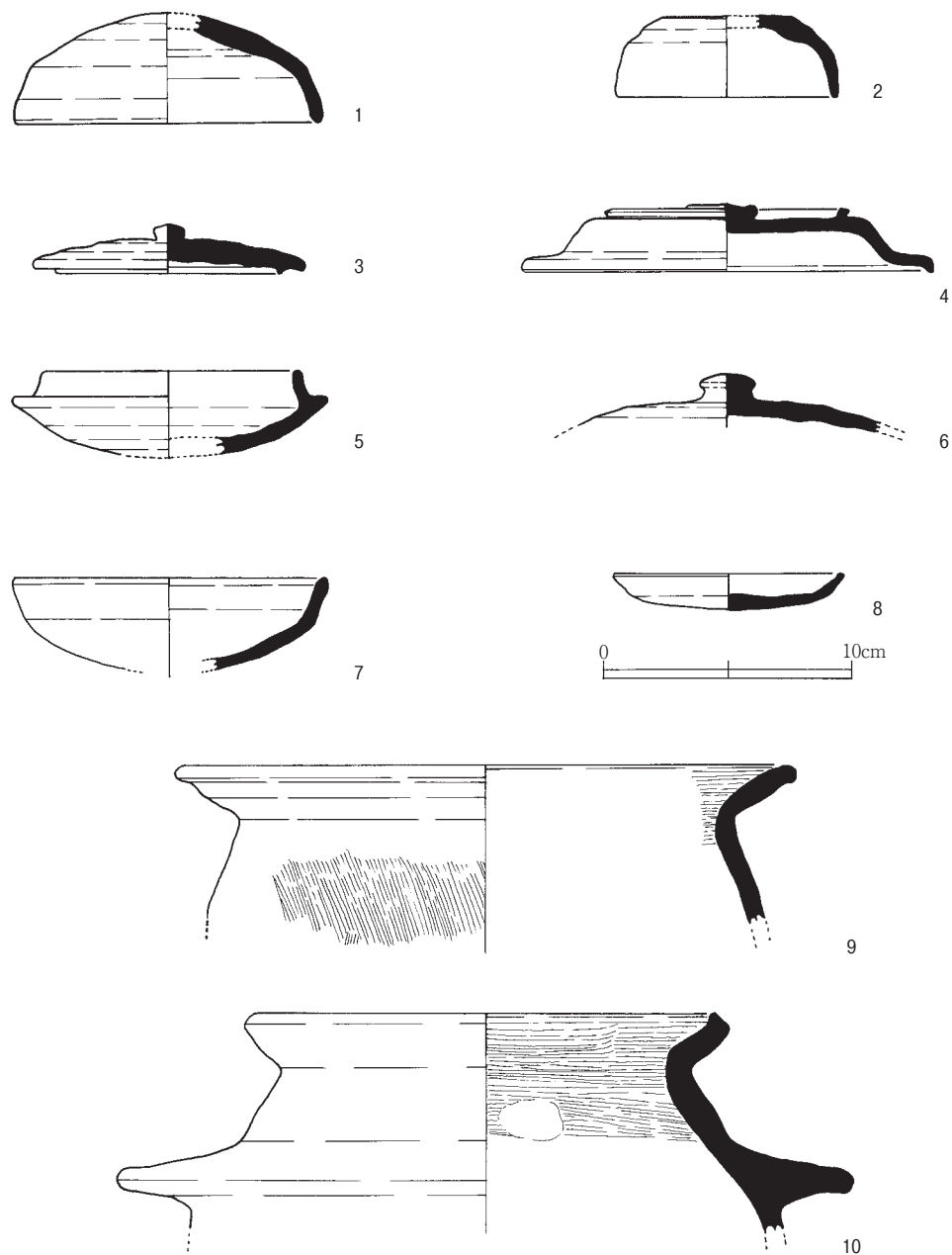


図13 須恵器・土師器実測図 1 : 3

末から8世紀初頭と考えられる。

3・4は第14・15調査区の周濠SD01上層から出土しているため、墳丘西側では周濠の最終的な埋没年代は7世紀末頃から8世紀初頭頃と考えられる。(鈴木郁哉)

5 土 師 器 (図13、図版7)

7は第15調査区の東西溝SD03から出土した坏である。復元口径16.6cm、残存高3.6cmである。内外面とも器表面が荒れているため、調整は不明である。胎土は粗く白色粒を含み、焼成は不良である。色調は茶褐色を呈する。飛鳥編年V期に位置付けられ、7世紀末から8世紀初頭と考え

られる。

8は第11調査区の遺物包含層から出土した皿である。復元口径9.2cm、器高1.4cmである。調整は口縁部に一段ヨコナデ、底部内面はユビオサエのち不定方向のナデ、底部外面にはユビオサエを施す。胎土は密で焼成は良好である。色調は淡褐色を呈する。伊野編年のAbタイプに位置付けられ、12世紀前葉と考えられる。

9は第15調査区の周濠SD01から出土した甕である。復元口径18.8cm、残存高6.1cmで、口縁部はやや膨らみながら開き、端部は丸く収める。口縁部内面にヨコハケ、体部内面にユビオサエ、外面は口縁部にヨコナデ、体部にタテハケを施す。胎土は粗く長石、雲母を含み、焼成は不良である。色調は体部外面に煤が付着し、茶褐色で、内面は淡褐色を呈する。詳細な時期は不明だが、古代に位置づけられよう。

10は第16調査区の土坑SK01から出土した土釜の口縁部である。復元口径18.4cm、残存高8.2cmで、口縁端部は内湾している。内面上半部にはヨコハケを施し、下半部は未調整である。外面はヨコナデを施す。胎土は粗く長石、雲母を含み、焼成は良好である。色調は茶褐色を呈する。内外面に煤が付着する。菅原編年の大和型B1型に位置付けられ、11世紀と考えられる。

(田中秀弥)

6 黒色土器・瓦器 (図14、図版8)

黒色土器 1は第16調査区南北溝SD02から出土した椀である。復元口径15.4cm、残存高4.7cmである。内外面ともに密なヘラミガキが施されるが、摩滅して図化できない。胎土は密で、焼成は良好である。色調は内外面とも黒色を呈する。森編年の畿内系V類IXに位置付けられ、11世紀後半と考えられる。

瓦 器 2は第11調査区の遺物包含層から出土した皿である。ほぼ完形で、口径9.1cm、器高は1.9cmである。見込みにはジグザグ状のミガキが施される。胎土は密で、焼成は良好である。色調は内外面ともに灰白色で、見込みの一部が黒色を呈する。法量と見込みのミガキから12世紀中頃から13世紀初めに位置づけられる。

3は第16調査区の南北溝SD02から出土した小椀である。復元口径9.6cm、器高3.7cmである。見込みには放射状のミガキが施される。胎土は密で、焼成は良好である。色調は内外面とも暗茶褐色を呈する。見込みのミガキから11世紀代と考えられる。

4～7は椀である。4は第16調査区の土坑SK01から出土した。ほぼ完形で、口径15.0cm、器高6.6cmである。内外面ともに密なミガキ、見込みには5往復程度のジグザグ状のミガキが施される。口縁部内側には沈線が施される。胎土は密で、焼成は良好である。色調は内外面ともに黒色で、一部白色を呈する。川越編年のⅠ段階C型式に位置付けられ、11世紀後半と考えられる。5は第11調査区の遺物包含層から出土した。復元口径は15.6cmで器高は4.8cmである。内面には密なミガキ、外面には粗いミガキ、見込みには連結輪状のミガキが施される。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は内外面ともに暗灰色を呈する。川越編年のⅡ段階B型式に位置付けられ

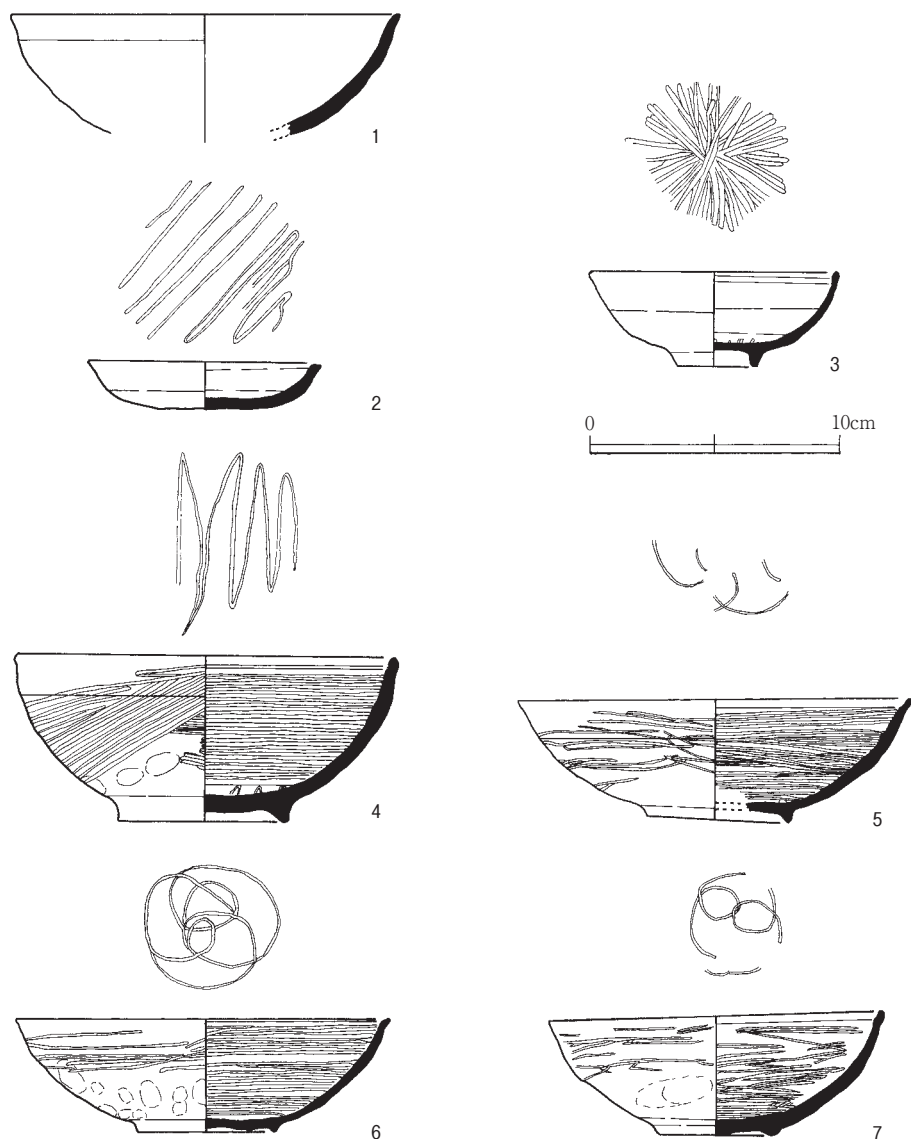


図14 黒色土器・瓦器実測図 1 : 3

れ、12世紀中頃と考えられる。

6・7は第11調査区の遺物包含層から出土した。6は復元口径14.7cm、器高4.5cmである。内面には密なミガキ、外面上半部には粗いミガキ、見込みには連結輪状のミガキが施される。口縁部内側端部には沈線が施され、高台は逆三角形を呈する。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は内外面ともに暗灰色を呈する。川越編年のⅡ段階B型式に位置付けられ、12世紀中頃と考えられる。7は復元口径13.1cm、器高4.7cmである。内面上半部に粗いミガキ、下半部に密なミガキ、外面上半部に粗いミガキが施される。見込みには連結輪状のミガキが施される。口縁部内側に沈線が施される。胎土は精良で、焼成は良好である。色調は外面が灰白色と一部黒色で、内面は暗灰色を呈する。川越編年Ⅲ段階A型式に位置付けられ、12世紀末から13世紀初めと考えられる。

以上、黒色土器では碗、瓦器では皿・碗・小碗があった。遺物包含層には中世土器が多く含ま

れるため、11世紀から13世紀初め頃に古墳周辺の土地利用がなされたと推測できる。（稲垣 僚）

7 その他の遺物（図15、図版8）

今回の調査では土馬が1点、古銭が2点出土した。土馬は第12調査区の遺物包含層から出土した。

上半身と脚1本のみが遺存し、残存長6.9cm、残存高6.2cm、胴部の厚さ1.7cmである。小型で尻尾につながる部分が太く、表面はナデのみで仕上げられていることから、大和型土馬G形式（8世紀後半）に相当すると考えられる（小笠原1975）。

古銭のうち1点は第14調査区の表土から出土した。直径2.3cmの完形で、中心孔はない。もう1点は第14調査区の遺物包含層から出土した。直径2.5cmに復元され、方形の中心孔をもつ。いずれも錆化が激しく、銭種は特定できない。（加納大誉）

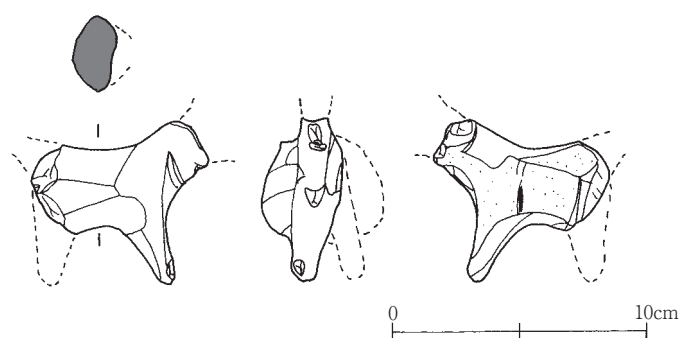


図15 土馬実測図 1 : 3

第5章 総 括

今回の発掘調査では、古墳の東側に3ヶ所、南側に1ヶ所、西側に2ヶ所の調査区を設定し、墳丘と周濠の解明を目指した。最後に4次に及ぶ調査の成果を総括したい。

古墳の規模と構造 これまで、斑鳩大塚古墳は直径約35mの円墳とされてきた。今回の調査では古墳の西側で墳丘を確認した。これまでの成果を合わせると、斑鳩大塚古墳は直径約43mの円墳で、東に幅約11.5m、長さ約3.4mの張り出し部をもつ。張り出し部は造り出しであった可能性があるが、削平されて葺石等も残らず、確定できない。墳丘は東側の第6・7・8・11・12調査区と、西側の第14・15調査区で確認した。盛土部分はすべて削平されている。第14調査区では現存する墳丘まで調査区を延ばし、地山がゆるやかに立ち上がる様相が見えたが、墳丘盛土は確認できなかった。現在の墳丘は昭和29年の発掘調査以降に盛土されたと考えられる。

第15調査区では周濠の両端を確認した。周濠は幅が検出面で約8.9m、深さ約0.8mである。第11・12調査区では張り出し部の分だけ周濠が狭くなる。周濠からは埴輪や土器が多数出土し、とくに埋土の上層から飛鳥時代後半頃の土器が多数出土したことから、周濠の埋没年代は7世紀後半と考えられる。

埴輪の様相 今回の調査でも多くの埴輪が出土した。円筒埴輪はタテハケののちヨコハケ調整を施し、B種ヨコハケと考えられる資料が含まれる。焼成は土師質で、透孔はすべて円形である。以上の特徴は川西編年Ⅲ期に相当し（川西1978）、これまでの出土成果と一致する。

形象埴輪は、蓋形埴輪と家形埴輪が第14調査区からまとまって出土した。いずれも複数の個体に分かれ、墳頂部には一定量の形象埴輪が樹立されていたと考えられる。蓋形埴輪はこれまで張り出し部の周辺から多く出土しており、今後、両者を比較する必要がある。

中世以降の土地利用 第11・12調査区では、建物としてはまとまらなかったものの、複数の柱穴を検出した。昨年度の調査で複数の土坑を確認しており、11～12世紀にかけて、古墳東側での土地利用がなされたと考えられる。第16調査区の土坑からは、ほぼ完形の瓦器碗と土釜の口縁部が重なって出土した。第15調査区でも中世以降の東西溝を1条検出したが、古墳の西側では全体に遺構が希薄である。

第13調査区では、周濠よりも上層で池の埋土と考えられる層を確認した。昨年度の第9調査区で検出した池は古墳の南側に広がることが判明した。

今後の課題 以上のようにこれまでの調査成果を総括した。当初は前方後円墳の可能性もあるとみて発掘調査を開始したが、最終的には張り出し部をもつ円墳であることが判明した。斑鳩では、最初に出現する古墳は前方後円墳の駒塚古墳であり、次世代の首長墓である斑鳩大塚古墳で円墳に変化する。

いっぽう、大和郡山市との境界付近にある瓦塚古墳群では、1号墳が約97m、2号墳が約95mの前方後円墳であり、中期以降も大型前方後円墳の築造が継続する。今後は瓦塚古墳群との関係

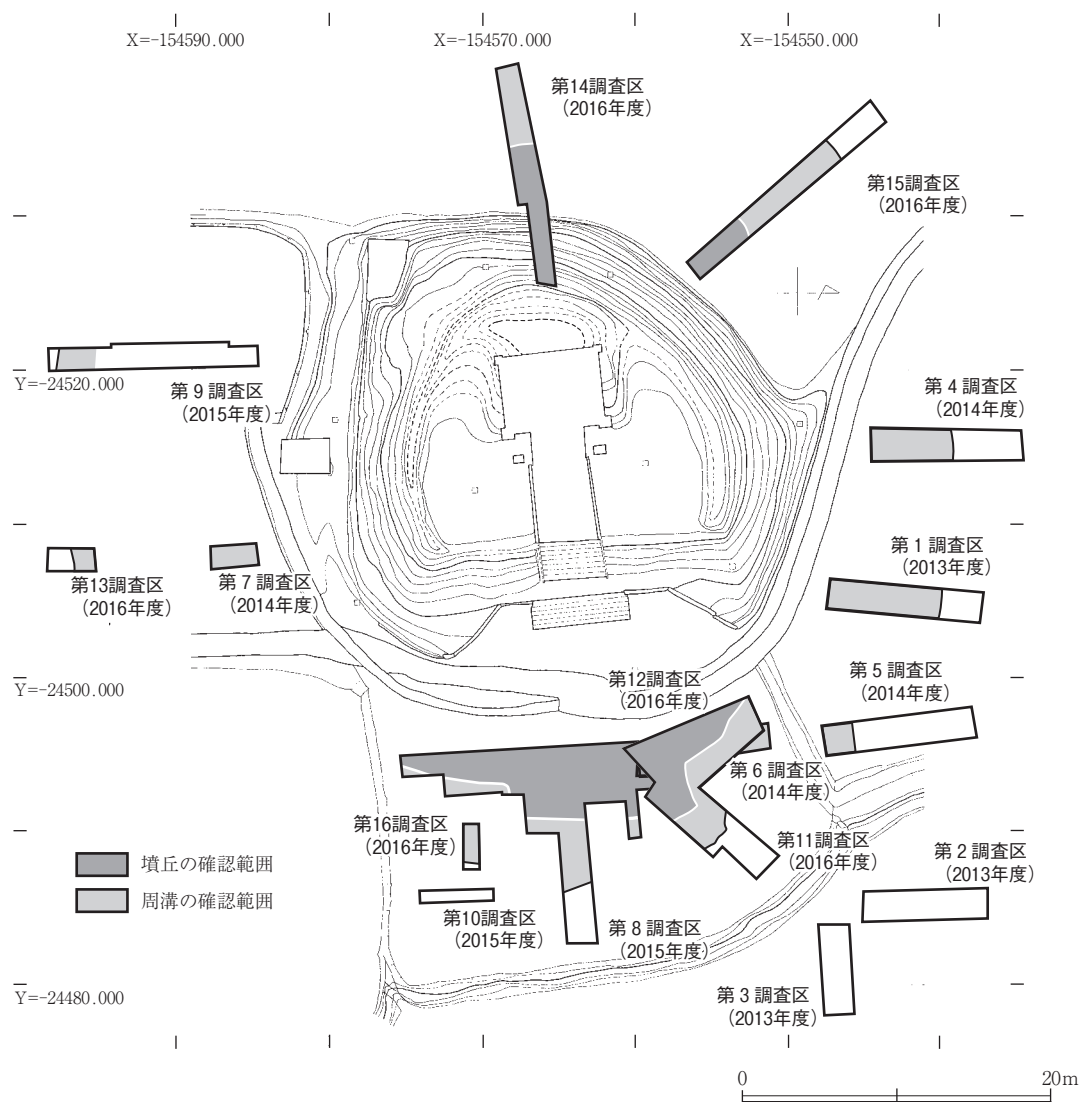


図16 墳丘と周濠の範囲 1 : 500

について、これまでに出土した埴輪を手がかりに考える必要がある。

斑鳩大塚古墳の周辺には、西に位置する戸垣山古墳など、実態の不明な古墳が存在する。戸垣山古墳については2017年8月に測量調査を行い、一辺約20mの方墳であることを追認した。これらの未調査古墳を含め、斑鳩地域における古墳の調査と研究を今後も継続したい。

(豊島)

参考文献

- 秋山日出雄編 1985『大和国古墳墓取調書』由良大和古代文化研究協会
- 荒木浩司 2007「駒塚古墳（01－1次）調査」荒木浩司編『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成13（2001）年度』斑鳩町教育委員会
- 荒木浩司 2011「駒塚古墳（02－1次）調査」平田政彦編『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成14（2002）年度』斑鳩町教育委員会
- 泉森 皎編 1977『竜田御坊山古墳群 付 平野塚穴山古墳』奈良県教育委員会
- 伊野近富 1995「土器器皿」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 梅澤あゆみ・清水早織・中村 真・豊島直博 2014「斑鳩大塚古墳測量調査報告」『文化財学報』第32集 奈良大学文学部文化財学科
- 近江俊秀 1991「大和型瓦器碗の編年と実年代の再検討」『古代文化』第43巻第10号 古代学協会
- 小笠原好彦 1975「土馬考」『物質文化』25号 物質文化研究会
- 小栗明彦 2007「蓋形埴輪編年論」犬木 努編『埴輪論考Ⅰ—円筒埴輪を読み解く—』大阪大谷大学博物館
- 勝部明生ほか編 1990『斑鳩 藤ノ木古墳 第一次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 河上邦彦・関川尚功 1977『斑鳩・仏塚古墳』斑鳩町教育委員会
- 川越俊一 1983「大和地方出土の瓦器碗をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 河村萬里・高左右 裕・豊島直博 2015「奈良県斑鳩町寺山古墳群測量調査報告」『文化財学報』第33集 奈良大学文学部文化財学科
- 北野耕平 1958「斑鳩大塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物抄報』第十輯 奈良県教育委員会
- 菅原正明 1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 関川尚功編 1976『斑鳩町 瓦塚1号墳発掘調査概報』奈良県教育委員会
- 田辺昭三 1966『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 辻川哲朗 2003「突帯—突帯間隔設定技法を中心として—」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 豊島直博編 2015『斑鳩大塚古墳発掘調査報告書Ⅰ』奈良大学文学部文化財学科
- 豊島直博・間所克仁編 2016『斑鳩大塚古墳発掘調査報告書Ⅱ』奈良大学文学部文化財学科
- 豊島直博・土屋博史 2016「奈良県斑鳩町甲塚古墳・亀塚古墳測量調査報告」『文化財学報』第35集 奈良大学文学部文化財学科
- 豊島直博・土屋博史編 2017『斑鳩大塚古墳発掘調査報告書Ⅲ』奈良大学文学部文化財学科
- 西 弘海 1978『土器の時期区分と型式変化』『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所
- 平田政彦 2008『史跡藤ノ木古墳 保存整備事業報告書』斑鳩町教育委員会
- 平田政彦 2013「春日古墳墳丘測量調査報告」『斑鳩文化財センター年報』第2号 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
- 平田政彦 2014「瓦塚古墳群航空レーザー測量調査報告」『斑鳩文化財センター年報』第3号 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター

- 前園実知雄ほか編 1995『斑鳩 藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 前田真由子 2009「製作技法からみた家形埴輪の変遷とその画期—近畿地方出土家形埴輪を中心に—」
『古文化談叢』第61集 九州古文化研究会
- 間所克仁・宮畑勇希・豊島直博 2016「奈良県斑鳩町寺山3・4号墳測量調査報告」『文化財学報』第
34集 奈良大学文学部文化財学科
- 森 隆 1990「西日本の黒色土器生産（上）」『考古学研究』第37巻第2号 考古学研究会